『ナツトリップ　〜　きみと花火と海と夢　〜』

特典シナリオ台本

【登場人物】

河瀬　柚乃（かわせ　ゆずの）

花之音女子大学に通う大学四年生。　あなたと同級生。
現在、付き合って2年目になる。
サークルは演劇サークルに所属し、役者として活動中。
中性的な顔立ちも相まって舞台ではよく男役を演じる。
サバサバしているように見えるが、面倒見はよく、周囲から好かれるタイプ。
繕わずにいられるあなたの前では、色んな表情をみせる。

《年齢》２２歳　《身長》１６６センチ
《血液型》Ａ型　《バスト》Ｃ

【あらすじ】

あなたは、花之音女子大学に通う大学四年生。
恋人の柚乃と同じ演劇サークルに所属しているが、
現在就活中でサークル活動はお休み中。

夏休みになってもお互い忙しい日々が続いており、
気分転換も兼ねて、一泊二日の旅行に行くことに。

二人っきりで過ごす、はじめての旅行。
当然何も起きないわけがなく、
海や旅館で、甘酸っぱい恋人シチュエーションが目白押し！

夢のようなひと時を閉じ込めた、一夏の記憶を楽しむ音声作品。
あなたも柚乃と一緒に、素敵な旅に出かけよう！

【INTRODUCTION：プレイバック・サマー　あなたの夢】

◯あなたの夢

あなたは、夢をみている。

それは、柚乃と過ごした夏の海の思い出。

波の音が寄せては返す。

波の音の隙間から、遠くから、柚乃の声があなたを呼ぶ。

その声が、だんだんと近づいてくる。

【EP01：スタート・メロディ　旅の始まり】

〇あなたの部屋（一軒家・二階）

目が覚めると、あなたの目の前には柚乃がいる。

「おはよう。よく眠れた？」

「…ふふっ、早く着いたから、部屋上がらせて貰っちゃった。
驚いた？」

「…そうだよ、約束の時間。
ちょっと過ぎてる。
……寝坊しちゃったね」

「そんな、慌てなくていーよ。
可愛い寝顔が見れてむしろ得した」

「荷物はまとめてる？
…おっ、えらい」

「ほんとにゆっくりで大丈夫だから。
準備できたら、下、降りてきて。
近くに車止めてるから」

「…うん。待ってる。
慌てずに。（笑って）逃げたりしないから」

〇玄関前・外

「…あ、きたきた。
大きい荷物持つよ。貸して」

車まで少し移動する。

「晴れてよかったねー。
あー、早く海入りたい。
暑くて、もう汗かいちゃったよ」

「お、その服可愛いね？　見たことない。
新しく買った？」

「(感想が漏れちゃって笑い気味に)　似合ってる。
バカンスに向かうお嬢様って感じ」

「…からかってないってば。
品のある服が似合うのは元がいい証拠だよ？」

「それに、今日のために用意してくれたのは、正直嬉しい」

「…あ、気づいた？　私も今日の服、新しいやつなんだよね」

「横に並ぶと…併せたみたいじゃない？
カップルコーデ感。
…うん、いい」

「今日はしっかりエスコートさせて頂きます、お嬢様。ふふふっ」

柚乃は鍵のボタンを押して車のロックを解除する。
あなたのためにドアを開けてあげる柚乃。

「さ、乗って」

○車の中

あなたは車に乗り込む。
柚乃も回り込んで運転席に乗り込む。

「おまたせ。
……？ん、ああ、匂い？　気になる？」

「一応来る時も吹いてきたんだけど…」

柚乃、除菌スプレーを吹きかけていく。

「……どう？　マシになったかな？
車の匂いってなんか慣れないよねえ。
久しぶりだと特に」

「あれ？　ベルト、差し込むところ見つかんない？
（少しふざけて）もしかして、まだ寝ぼけてる？
…ちょっと失礼するよ？　よいしょっと」

柚乃、身を乗り出しあなたに近づいてシートベルトをつけてあげる。

「えーっと……。どれどれー？
……あったあった」

ベルトが止まってカチッと鳴る。

「これでオッケー。
…ああ。
まあ、知らない車だと、差込口見つからないことあるよね」

「この車？　お父さんからのお下がり。
前に話さなかったっけ？
あの人、最近買い換えたから貰ったの。
だからそう、念願のマイカーです。拍手っ」

「……えーっと、目的地の住所は……。
あ、わかる？　言って貰っていい？」

「(カーナビの真似をしてふざける)
ぽんっ、目的地を入力してください。
……私は、柚乃カーナビです。目的地を入力してください。
(堪えきれずに少し笑う)」

「(住所を聞いたリアクション)……ふん、ふんふん。
ぽんっ、目的地までおよそ2時間程度で到着します。
素敵なドライブをお楽しみください」

「(笑いながら)だってさ。
ちょうどいいドライブになりそうだね」

「それじゃ、しゅっぱーつ」

車内で音楽がかかり始める。
車が動き出す。

「やー、やっと夏休みらしい日にたどり着いたって感じする。
大学生最後の夏休みなのにさ」

「…本当に。やっとだよね~。
スケジュール合わなすぎ。
今年の夏、全然まともなデートできてない」

「あの…ほら、前に行ったふわふわの……ふわふわの!
(思い出して)かき氷!
(笑いながら)もうちょっと、かき氷出てこないとかやばいね。
完全に暑さにやられてる」

「そう、かき氷、行ったの、一ヶ月前とかだよね?
時間経つの早いなあ…」

「就活、やっぱ忙しい?
…まあ、そうだよね」

「……うん。うん。
（感心して）……すごいなあ」
私だったらすぐ挫けちゃいそう。尊敬する」
「私？　私は、最近だと、
毎日稽古場行って帰るだけの生活って感じかな」
「……そうかなあ。
んー、大変さって比べるものじゃないと思うけど。
……どっちもお疲れ様ってことで」
「この旅行中くらいは、色々忘れて楽しもうよ。
今回は、二人で行く初めての旅行なんだから」
「向こう着いたら、どうしよっか？
渋滞もなさそうだし……このままいけば、
お昼ぐらいに着きそうだけど」
「とりあえず、チェックインして荷物置く？
……だよね。荷物持って歩くの大変だし」
「うん。じゃあ、荷物置いたら、
お昼は旅館から遠すぎない場所で食べて……。
で、帰り際に海の様子見つつ戻って、着替えようか」

信号で車が止まる。

「したら、お昼食べる場所探しておいて貰っていい？
……え？　目星つけてきた？　…さすが」
「どんな感じのお店？
今スマホでホームページ開ける？」

「みせて、みせて？
あ、いい。こういう雰囲気、私好きだよ。
内装も可愛いし、美味しそう」

「……じゃあ、ここにしよう」

車が走り出す。

「…え？　笑ってないよ？　別に」

「本当になんでもないって。
……素直に？　えー……。
……私が好み、考えてくれたんだなって。
それだけ」

「…それだけで嬉しくなっちゃうよ。
一緒にいないときも、私のこと考えてくれるんだって」

「なんかおかしい？
…おかしくないでしょ？　そうでしょ」

信号で車が止まる。

「あ、そこの鞄の中から、ペットボトルとってくれない？
水分、補給したい」

あなたは、ペットボトルを手に取る。

「ありがとう〜。
飲ませて？」

あなたは、ペットボトルの蓋を開けて、
柚乃に水を飲ませる。

「（水を飲むリアクションをして口からボトルを離す）
ふうっ。
……じゃあ、こっちも補給しておこうかなー？　ふふっ。
（軽くほっぺにキスして）……ちゅっ」

「……素敵な思い出、いっぱい残そうね」

【EP02：チェンジ・スイマー　水着に着替えて】

○旅館・宿泊する部屋

「はあ～、部屋の中、涼しい～……。
（伸びをしながら）ん～！（伸びをやめる）ふうっ。
あー、食べたねー。
……うん。美味しかった」

「……まあたしかに、結構量多かったかも」

「もしかして、お腹の心配してる？
あー、だからあんまり食べてなかったんだ。
体調悪いのかな？って、ちょっと心配してた」

「もともと細いから大丈夫だって」

「……ここで着替えていくでしょ？水着。
はあ～、楽しみだなー」

「え？全然えっちじゃないよ？
私は海に入るのが楽しみだなあって思っただけで」

「意識しちゃって。
もちろん、水着も楽しみだよ？絶対可愛いから」

「ほら、恥ずかしがらないで。
早く着替えよ！」

カバンを探って水着を探し始める。

「海から近い旅館とって良かったね。
外の更衣室使わないで、部屋で着替えられるし、
帰りもそのまま戻ってこれるし……」

柚乃、あなたの元に近づいて覗いてくる。

「ねえ水着、どんなの買ったの？
ちょっとー、そんな必死に隠さなくても。
……見てからのお楽しみ？
じゃあ、ここで待ってるね」

間。

「……なに？　あっちいって？
それじゃ着替えみれないじゃん。
あ、わかった。私も一緒にここで着替えるから」

「えー？　背中向かなきゃダメ？
……けち」

二人、服を脱いで水着に着替えていく。

「(呼びかけて）着れたよー。そっちはどうー？
…大丈夫？
じゃあ二人同時に『せーのっ』で振り返ろう。
…せーのっ！」

「わああっ～！　はー、かわいい～っ！
え、すごくいいね。
……うん、うんうん、えー……かわいい」

「私のは、どう？　……ふふふっ、いい感じ？
なんか、新鮮でしょ？　……うん、うん。
メンズライクなファッションが多いからね、私。
こんな露出のある格好、滅多にしない」

「……特別な人じゃないと見せない格好だよ」

「あ、そうだ……ちょっと、渡したいものあるんだよね」

カバンからパーカーを取り出す柚乃。

「……じゃーん！
水着の上に着るパーカー！
いわゆるラッシュガードっていうやつ」

「どう？可愛いでしょ？
水着買いに行った時、一目惚れしちゃって衝動買い」

「それでさ、実はこれ、二色あって……。
おそろで二枚、買っちゃった。
…はい！　あげる！」

「いいの、いいの。
私が一緒に着たかったんだから。
多分その水着とも合うと思う」

「……どういたしまして。
一枚あると便利かな？　と思ってさ。
寒くなったら羽織れるし、日焼け対策にもなるし」

あなたはパーカーを羽織ろうとして

「あ、羽織るのちょっと待って！
……まだ日焼け止め塗ってなかったね、私たち。
なんか忘れてると思ったんだよねー。
もう、すっかり外に出れる気分になってた。やばいやばい」

「私、日焼け止め、結構いいやつ買ったから使う？
……遠慮しないで。海の紫外線って強いから。
……はい。手を出してくださいー」

「……隅々まで塗っておかないと」

「あ、足りなかったら勝手にとっていいよ？」

「……よし」

「背中塗ってあげるよ。
届かないでしょ？　後ろむいて？」

柚乃、日焼け止めを手にとって

「じゃあ、塗るよ？　塗るよ？　塗るよー？
ふふふっ、はい、塗りまーす」

日焼け止めを塗っていく。

「……後ろ姿って、こんなにマジマジとみる機会ないから新鮮」

日焼け止めを塗っていく。

「（呟く）……背中、大胆だなあ」

「……悪い意味じゃないよ。
色っぽくてドキドキするな、って。
（独り言）……なんというか、抱きしめたくなる」

日焼け止めを塗っていく。

「（独り言）あー、……いけない。理性保てるように頑張る」

日焼け止めを塗っていく。

「……延ばして、延ばして。
これでばっちり」

「私にも塗ってくれる？」

日焼け止めを塗っていく。

「ひゃっ！　ご、ごめん。変な声でた…」

日焼け止めを塗っていく。

「…大丈夫、続けて。
（独り言）……触れられるって。うん、なんでもない」

「背中？　どうかした？
…そ、そんな、綺麗じゃないよ」

日焼け止めを塗っていく。

「…まあ、好きって言ってくれるなら、嬉しいけど」

日焼け止めを塗っていく。

「（近くで）……んー、ちょっとー？　ねえ、何？
…後ろから、ぎゅーしてるでしょ？
私は我慢したのに、抱き締めるの」

「ねえ、私も抱きしめたい」

柚乃、あなたを抱きしめる。

「（抱き締めた後はアドリブで。深呼吸もする）
同じ匂いがするね。……日焼け止めの匂い」

間。……しばらく静かに抱きしめる。

「……ハイ！　おしまい！
これ以上は、止まらなくなるから」

「他に準備は……大丈夫そうだね、うん」

「（ふざけて）さあ、お嬢様。
この私が海まで連れていきましょう。
お手をどうぞ」

「ふふふっ、捕まえた。
じゃあ、遊びにいこ！」

【EP03：ウォーター・バカンス　海と砂浜で散歩して】

〇海・波打ち際

波打ち際に柚乃がいる。
あなたは柚乃から少し離れて後ろに立っている。
波の音に混じって、遠くから柚乃の声が聞こえてくる。

「おーいっ。こっちきなよ〜。…はやくー」

あなたは柚乃の元に近づいていく。波の音が近くなる。

「（海を見て）はあ……。なんかため息出ちゃう。
海の広さに」

「ほら、あそこまで行けば、多分波くるよ？」

さらに近くまで歩いていく。

「（ぬかるんでいるところを踏んで）
ふうー、あー、地面冷たい〜。
（波をみて）……あ、くるよ、くるくるっ！」

波が二人の足元に広がっていく。

「（冷たさに歓声をあげる）ふわあぁーっ！！
…あ〜〜〜……。つめたい〜〜……。
うみだー……。（ちょっと笑いながら）ごいりょく……」

海に入っていく二人。

「（海に浸かって）はああ……。気持ちいい……。
………最高だねえ」

「身体がさ……。
あー……。
もう何もいえない」

しばらく海に浮かぶ二人。

「あー……」

「……ねえ、なんかさ、
ずっと浮かんでられそう」

「わかる？
……だよねえ」

しばらく海に浮かぶ二人。

「はああ……。
なんか落ち着き過ぎちゃった。
もっとはしゃぐと思ってたけど」

「海の中、気持ちいいんだもん。
暑いのが悪いね」

「ねえねえ、ちょっとこっちみて」

柚乃、あなたに水をかける。

「……ほいっ。ふふふっ。
…えー？ 海といえば、こういうのじゃないの？」

あなたは柚乃に水をかける。

「（水をかけられて）ぶっ。…やったな？」

水を掛け合う二人。

「ふふふっ、あーもう、最悪ー。
これ多分、全部メイク落ちたー。もー（楽しそうに）」

「そろそろ、あがろっか。
…うん。そうしよ。
喉乾いた」

海から上がっていく二人。

「（海から上がって）はああ〜。
（少し歩いて）砂の上、あったかーい……」

サンダルの砂をかるくはたいておとす。
サンダルを履く二人。

「あー、このサンダルを履いた時の感触ー。
ぐちょってする」

荷物のところまで戻ろうとして歩き始める。

「まあ、どうせ全身濡れてるし。
慣れちゃうんだけど」

荷物のところに到着する。

「さてと……。
あ、その前に……」

バックを開けてタオルを取り出して

「拭いてあげる」

柚乃、あなたの身体を拭いていく。

「(拭いている時の最中の声、アドリブで)
……こんなもんかな」

柚乃、ペットボトルを手に取る。

蓋を開けて飲む。

「(水を飲んで)……ふう。
何？ 飲みたいの？
(口を開けてと指示して)んっ。…口開けて」

あなたは柚乃に水を飲ませてもらう。

「(呟くように)……間接キス」

少しの間。

「……アイス、食べたくない？
たしか向こうのほうにあったよね、海の家」

「…そうそう。来る途中にさ」

「行ってみようか。散歩がてら。
…ね、行こう」

○砂浜

「……あ、ごめん。
さりげなく繋いだつもりだったんだけど」

「というか、ちょっと。手、ベタベタするね。
海水のせいか。ごめんね」

「…あったかい、手。
　私、冷たくない？　平気？」

「さっきの海で冷えたのもあるけど、
　普段から冷え性なんだよね。
　体温高いの羨ましい」

「あー、ちょっと日差し落ち着いてきた？
…雲が出てきたからかな？
さっきよりはマシだね」

「あ、あそこだね、海の家。
　まだやってるかな？
……あ、大丈夫そう」

○同・海の家アイスボックス前

「んー、食べたいのある？
　好きなのとか」

「……じゃあ、うん。二人で決めよっか」

「どれにしようかなあ……。
（指を差されて）あ、いいね。
…うん、うん。甘いのも好き」

「だけど、今は……。
（見つけて）あ、これとかどう？
これ好きだったなー。
二つに分けられるアイスキャンディ」

「え？　食べたことない？
おばあちゃんちに行った時とか…」

「…ああ、そっか。
たしかに。今は、あんまりみないかも」

「ここで初体験してこ？
（少し遠くの方で）すみませんー。これくださいー」

袋から、アイスを取り出して。

「……半分こ」

「綺麗に割れるかな……。よっ！
（無事割れて）おっ、いけた〜！
…はい、どうぞ」

「（アイスキャンディを食べて）ん〜、つめた〜っ！
やっぱ、これだね〜。
どう？おいしい？」

アイスを食べながら

「……あ、ちょっと、そこ。
下の方、あー、（半笑で）垂れてる垂れてる」

「テッシュ持ってた気が……。
ちょっと私の、持ってて」

柚乃、カバンからテッシュを取り出して、
あなたの手を拭く。

「……ふふふっ。
……え？いや、なんかお母さんと娘みたいだなあって。
面倒見てあげている感じが」

「んー、よちよち。かわいいでしゅね～。
ふふふっ、はいはい、怒らないでー」

柚乃、カバンにティッシュをしまう。

〇同・砂浜

散歩の続き。

「…結構、遠くまで来たねえ。
（周りを見渡し、気配を感じて）……誰もいない」

「……なに？
いいもの見つけた？　左？」

「……あ、あー。
あれ、ひまわり……？
…うん。ひまわり畑かな？」

「あんなにいっぱい……。
…うん。せっかくだしそこまで行ってみようか」

「階段があるね。足元、気をつけて」

階段を登っていく二人。

〇同・ひまわり畑

ひまわり畑に到着。風が吹き抜ける。

「わああ、すごい……。
一面のひまわり……」

「花びらがゆらゆら揺れて、
金色の海みたい……」

「あ、写真写真。
写真撮ろうよ！
私、インスタントカメラ持ってきててさ」

柚乃、カメラを取り出してフィルムを巻く。

「そう、フィルムの。
ひまわりバックで撮ろうよ」

「…んー、どの角度で撮ろうかな」

「ここだと画角に入らないかも…」

「あ、ここだ、ここ。この角度！
ちょっと、そのまま動かないでね……」

「そうそう。いい感じ。
はあい、笑ってー。
……かわいい」

思わず、柚乃、シャッターを切ってしまう。

「あ、ごめん。シャッター押しちゃった」

「…フラッシュ？　眩しかった？　ごめん。
でも、新鮮でいいでしょ？」

「じゃあ、また何枚か撮るよー！」

柚乃、シャッターを切る。

「スマホでも撮っとこ」

柚乃、スマホで写真を撮る。
何枚か撮った後、連写する

「（連写の音に笑って）なんか連写モードになっちゃった」

柚乃、近づいてきて

「写真見る？
……いい感じじゃない？」

「二人のも撮ろ？
…こっちきてー。
……いくよー」

柚乃、動画を回す。※手を伸ばして自撮りで撮影している。

「……動画でしたー。
（笑って）はあーい。今度が本ちゃん。
…はい、チーズ」

柚乃とあなた、スマホで写真を撮る。

「もう一枚、いきまーす」

柚乃とあなた、スマホで写真を撮る。

「夏休み、さいこー」

柚乃とあなた、スマホで写真を撮る。

「（確認して）……ちゃんと撮れてるよね。
……あ、いいの、いっぱいある」

「というか、カップル感あるね。
パーカーお揃いにしてよかった」

雨の滴が空から垂れてくる。

「……あれ？　いま……。雨？」

「気のせい……？」

雨が少しずつ本降りになっていく。

「あー、降ってきた……」

「予報では降らないって言ってたのに。
傘持ってきてないよ」

「……ああ、そっか。私たち、濡れてもいい格好だったね」

「じゃあ天然のシャワーだ、これ。
浴びちゃおうっか」

雨の中にいる二人。

「（少し強くなる雨に当たって楽しくなる）
ふふふっ、ははは！」

「雨って嫌なイメージあったけど、
汗を流してくれるみたいで、
これは、気持ちいい……」

「…ねえ、このままもう少し……こうしててもいい？」

しばらくして雨は上がっていく。

【EP04：エアー・マインド　露天風呂で晩酌を】

○露天風呂

海から帰ってきた後、
あなたと柚乃は部屋についている露天風呂に入ることに。
引き戸をあげて入っていく。目の前に露天風呂の光景が広がる。

「…景色すごーい。
ここから海、見えるんだね。
（感動して）はあー……」

「ここ貸切なんて贅沢だなあ。
露天風呂付きの部屋なんてよく予約とれたね。
シーズン的に人気だったでしょ？」

「……そんな前に予約してたの？
…ありがと。
そういうとこ、愛を感じる」

「あ〜、潮風で髪の毛パサパサ〜（笑いながら）
ほら、足の指の間。
まだちょっと砂残ってる」

「うん。……早く洗っちゃおう」

柚乃、シャワーを出して温度を確かめる。

「……背中、流してあげるよ。予約のお礼」

「何？　恥ずかしがってるの？　今更？
（呟く）もっと恥ずかしいこと、してるのに」

「まあまぁ、遠慮しないで。
はーい、お嬢様ー、座ってくださいー」

「……背中。
あ、いや、うっすらだけど、焼けてるなって。
（聞こえないくらいの小声で）……ちょっと、やばいな」

柚乃、シャワーであなたの髪を流し始める。

「温度、大丈夫そう？
……あ、やっぱり髪の毛、少し痛んでる。
ちゃんと洗って、綺麗に戻さなきゃね」

柚乃、シャンプーを手にとって泡立て髪を洗っていく。

「…どう、痒いところない？　力加減とか大丈夫？」

「……なんかさ。
私、中学まで妹と一緒にお風呂入ってて、
髪洗って上げてたの、思い出す」

「四つ下かな？
…全然仲良いよ？
けど、私が役者やってることには反対してる（笑）」

「……しっかりしてるよ、本当に。
昔は甘えん坊だったくせにさ。時が経つのは早い。
あ、流すよー」

柚乃、あなたの髪を流す。
続けてトリートメントを手に取る。

「トリートメントをつけて、髪復活させるよー。
はーい」

トリートメントを髪につけていく。

「……そうそう。今、高三。受験生。
だから、たまに夜食とか作ってあげてる」

「…ああ、そういえば、料理作ってあげたことなかったか。
二人とも実家だからね。
なかなか難しいよねえ…」

「(冗談っぽく)一緒に住んでたら
いくらでも作ってあげるんだけどなあ～」

柚乃、シャワーであなたの髪を流す。

「……よし。
髪の毛、前に流すよ。
背中、洗うから」

柚乃、ボディーソープを手に取って泡だて、
背中を洗っていく。

「……ふふっ。どうしたの？ くすぐったい？
変な感じする？」

「まあ、そうだよね……。
直接肌に触れるとさ……まあ、その、……ねっ」

「(呟くように)…ここ、こうなってんだー…」

「え？ 何がって？ ……なんだろうね」

柚乃、シャワーであなたの背中を流す。

◯露天風呂・湯船

あなたは、湯船に浸かっている。
遠くから柚乃が日本酒（桶に入っている）を持ってやってくる。

「はーい、お待たせー」

柚乃は、湯船の近くに日本酒を置いて、湯船に入ってくる。

「はああ～……。あー……あったまる～……」

「……ちょっとさ、これ、試してみようよ。日本酒」

「……宿のサービス見てたら、持ち込みできるって書いてあって。
さっき下のロビーで注文しちゃった。
憧れてたんだよね、こういうの」

「…もちろん。一杯だけ、軽く。
はい。お猪口どうぞ」

柚乃は、あなたのお猪口に日本酒を注ぐ。

「…入れてくれるの？　じゃあ、お願いします」

あなたは柚乃のお猪口に日本酒を注ぐ。

「ではでは。……乾杯（優しく）」

お猪口をあわせて、一緒に飲む。

「ふわああ……おいしい。
冷たくて、すっきりしてる」

「……（息を吐く）」

「なんかさ、一緒に入るお風呂って、
特別な感じがする」

「……裸になって、ゆっくり落ち着けて、
隣に、好きな人がいる」

「……幸せ」

「一日あっという間に過ぎちゃった。
お風呂に入ると毎回思うよ。
あー、終わっちゃうって」

「…あ、そうだ……。
まだ、今日終わりじゃない。
やってないことあった」

「…え？　……ダメ。今は教えない。
お風呂上がったらね」

【EP05：フラワー・ドリーム　線香花火とこれから】

○外・砂浜（夜）

柚乃とあなたは、二人で砂浜にやってくる。
コンビニで買った花火とお酒（チューハイの缶）を持って。

「すっかり夜だね。もう真っ暗。
…ちょっと涼しい？ 昼と比べたら、そうだねー」

「結構売り切れちゃってたね、花火。
みんな考えることは同じか」

「……うん、でも、線香花火残っててよかった。
私、好きなんだよね。小さくて可愛いし」

「……残り物には福来るってね」

「はい、一本。
……火、つけるね」

柚乃、チャッカマンで花火に火をつけてあげる。
花火から火が吹き始める。

「(チャッカマンをカチカチするアドリブから)
……おっ、ついたっ」

「光の粒が、パチパチ跳ねてる。
……可愛い」

線香花火が終わる。

「……はやいー。もう終わっちゃった。
まだ、あるけどね」

柚乃、チャッカマンで花火に火をつけてあげる。
花火から火が吹き始める。

「……おっ、さっきのとは、光り方が違う」

線香花火が終わる。

「……ずっと見つめちゃうね、これ。
なんか、黙っちゃう。
…でも、嫌な沈黙じゃない」

柚乃、チャッカマンで花火に火をつけてあげる。
花火から火が吹き始める。

「……」

線香花火が終わる。

「……おしまい」

少しの間があって

「…ね、ここでさ、さっき買ってきたお酒、
飲んじゃわない？」

柚乃、ビニール袋からチューハイの缶を取り出し、
缶を開けて

「…ほいっ」

乾杯して二人、チューハイを飲む。
柚乃は、何か話したそうにしている。

「(息を吐いて) ふうー……。
……あのさ……。
……いや。……あー……」

「まあ、別に……。あー……。
……ほんとに、まだ先の話なんだけど」

「……私、卒業したら実家出ようと思ってるんだよね。
…うん。良い機会だし。
妹もほら、大学生になるしさ、いつまでも居られないなって」

「…住む場所とか、まだまだ、全然これから……。
というか、ほとんど決めてないんだけど」

「……んー、卒業しても役者続けるから、
稽古場に通えるなら、場所にはそんなに拘ってなくて」

「……まあ、うん。
でも部屋の大きさとかはさ、ちょっと考えてるんだよね」

「………一緒に暮さない？
卒業したら」

「もちろん先のことだし、
すぐには決められないと思うけど……」

「……私はこの先も、ずっと一緒にいたいって思ってて」

「……え？ ほんとに？
いいの？ そんな、あっさり……」

「…本当に？
……そっか。
（緊張が解けて）……あー、よかったあ～～。
……あー、怖かった～～」

「……四年になってさ、お互い別々の道を歩み始めた気がしてて。
すこしだけ、不安だったんだ」

「……うん…うん。
嬉しい。同じ気持ちでいてくれて」

「……あらためて、これからもよろしく」

「そろそろ戻る？」

「…うん。……はい。手。
……逸（はぐ）れないように」

「……おっ、だいぶ、ぎゅっ、て掴んだね。力強い」

「……ねえ。
（相手の顔を見つめる間があって）
（柚乃、あなたにキスをする）……ちゅっ」

「（すごく小さいな声で）……ありがとう」

○旅館・部屋（夜）

柚乃とあなたは布団で寝ている。

「あつい〜〜……。
クーラー、温度下げてもいい？
このままだと寝れない」

「リモコン…。ん〜〜」

柚乃、寝た状態で手を伸ばして、リモコンを取り、
温度を下げる。

「よし」

「……ねえ。…ねえねえ。
背中合わせ、寂しい。
こっち向いて。
ねえ……」

「…もうちょっと、近く。
はい、キャッチ。もう離れませーん。
でも暑くなったら離れまーす。ふふっ」

「掛け布団、どかそうか。
なくても平気だよね」

柚乃、掛け布団をどかす。

「もうこんな時間。
布団入ってから二時間くらい経ってる」

「さすがに眠くなってきた？
…うん、疲れたね～。
けど、楽しかった。今日一日」

「……可愛かったな～。水着姿。
…ねえ、また見たい。部屋とかで着てて欲しい」

「…やだ？ じゃあまた絶対こよう。海」

「…約束ね。
(柚乃、あなたにキスをする) ……ちゅっ」

「……唇、柔らかくて……好き。(キスをする) ……ん……ちゅ。
(キスをする) ……ん……ちゅ」

「……ねえ、そっちからも。して？
(キスをする) ……ん……ちゅ。
(キスをする) ……ん……ちゅ。
……大好き」

言葉がなくなってくる。眠りの時間。

「……昨日さ、夢に……出てきたんだよね。
…どんな？ んー、ただ一緒に海にいて、それで、二人で遊ぶ夢」

「まさに今日みたいな……。
え？ 似たような夢みたの？ 朝？」

「そんなことあるんだね。不思議…。
じゃあ私たち、今日、夢の中でも、現実でも、
ずっと一緒にいたんだね」

「…たしかに夢みたいな日だった。
この夏が、いつまでも続けばいいのに」

「……うん。永遠に」

「……また一緒に旅行いこう。

……おやすみ」

【EPILOUGE：リピート・サマー　二人の夢】

〇あなたと柚乃の夢

あなたと柚乃は、夢をみている。

波の音が寄せては返す。

柚乃と過ごした一日の思い出（声）が波間から聞こえてくる。

そして、だんだんと遠くに消えていく。